中国の一日 1936年5月21日

茅盾 主編　中島長文 編訳

平凡社

茅　盾（ぼうじゅん　Máo Dùn）1896〜1981
本名は沈徳鴻，字は雁冰。浙江桐郷の人。
1920年代初期の文学研究会以来，リアリズムを主張し，現代中国の代表的作家・評論家となる。代表作に《子夜》等がある。現在，全集の刊行が準備されているという。

中国の一日
1936年5月21日
定価　2000円

主　編　茅　盾
編　訳　中島長文
訳　者　中島みどり＊萩野脩二
　　坂井東洋男＊森　紀子
装　幀　三村　淳
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社 平凡社
郵便番号　102　東京都千代田区三番町5番地
振替　東京 8-29639　電話（03）-265-0451
印　刷　東洋印刷株式会社
製　本　株式会社石津製本所
発行日　1984年5月21日　初版第1刷

不良本のお取替えは直接読者サービス係までお送り下さい（送料は小社で負担いたします）

中国の一日 1936年5月21日

茅盾 主編　中島長文 編訳

平凡社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

『中国の一日』の序――蔡元培 9
編集の経過について――茅盾 11

I　南京・上海

「中国の一日」の中の「私の一日」22　五・二一雑記 24
仁丹 26　獄中記 29　給料の受取り 33　「馬日」 39
酒のあと 44　膏薬売り 46　大安売り 48　「会計室」の一日 52
ある紡績工場労働者の話 57　紡績工場の一日 61
法廷にて 64　監獄から来た一通の手紙 69

II　江蘇・浙江・江西・安徽・湖北・湖南

集中訓練の一日 74　年貢取立て 76　「愛国」 82
二等郵便局のスケッチ 85　返されてきた贈り物 92
田舎小学教師の生活の一頁 96　今日も昨日も 100
繭市 103　助産日記 107　蜂飼いの悲哀 110　硬貨買い 114
村の小学教師の日記 118　合作できぬ合作社 120
女子中学生の日記 125　南昌のひとこま 129　お客様 132
「毒物」の世界 133　農林試験場 134　ひとこま 138
大家庭の冤魂 139　雑炊売り 143　印紙検査 148
壮丁徴発 155

Ⅲ　北平・天津・河北・チャハル・綏遠・失われた土地・山東・河南・山西・陝西・甘粛

逮捕 162　慰労大会 169　直沽埠頭にて 174
書をかく 179　最後の日 183　消息 186
この日の包頭河西の農民 190　一通の来信 194
永遠に忘れられない授業 197　五月二十一日の唐山 201
「この道で食うのもまったく楽じゃない」 204
五月二十一日、煙台にて 209　救済物資の放出 212
独り芝居の蓄音器 219　わたしの五月二十一日 223
綏徳にて 226　隴東の騎兵隊にて 228　一つの事実 234

Ⅳ　広東・貴州・四川・陸と海・海外より

診察 240　咆哮 242　税金が払えない 246　通りの光景 248
械闘 252　「清郷」 255　山地の町の一日 257　一日間 260
日記一頁 265　郷里の一日 273　朝から晩まで 276
三等車にて 281　黄海の浜にて 283　匆々にすぎた一日 287
香港の五月二十一日 289　海のかなたにて 293
五月二十一日のこと 294
小さな椅子から――『中国の一日』あとさき――中島長文 301

中国の一日

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

『中国の一日』の序

蔡　元培

「中国の一日」という題目をきけば、誰しもそれは新聞の役目だと思うだろうが、少し考えてみると、新聞に載るのはその大半がその日よりも前の事であることに気づく。たまたまその日の緊急電報や、その地のニュースでせいぜい遅くて六時以前に入ったものが、臨時に挿入されることはあっても、ありきたりのニュースは明くる日まで発表をひかえざるをえない。とすれば新聞の紙面には実は完全な一日はないのである。そこで一歩退いて考えると昼刊〔ここでは正午近く出る新聞のことを言う〕*と夕刊とがある。中国の昼刊はまだ見たことがないのでなんともいえないが、発行が正午である以上、午後のニュースは、当然、掲載にはまにあわない。夕刊は、昼刊のないところでは朝刊と重複しないすべてのニュースを収めることができ、二十四時間をカバーできそうに思える。しかし夕刊が刷られるのはたいてい四時か五時だから、それ以後のニュースは翌日の新聞に譲らざるをえない。とすればやはり完全ではない。そして朝刊と夕刊とにかかわらず、その紙面には限りがある。特殊なニュースは別として、各方面の生活状態は、いきおい全部を網羅するわけにいかないことは明々白々である。

そこで「中国の一日」というからには、その編輯者は一冊の書にまとめ、直接材料を募集せざる

をえないのである。原稿募集の広告が出てから、届いた投稿は三千篇以上、六百万言を下らない。発行者と購読者の便宜のために、それを減らしに減らしたが、なお四百九十篇、字数にして八十万字が残った。意外の収穫としなければならない。

この収穫をえたのみか、編集委員会と投稿者とはなじみになり、以後編集委員会が、ある場所またはある事柄について特別の調査を必要とする時には、無数の投稿者の中から幾人かの人を選んで委託すれば、必ずや編集委員会の希望をみたすことができるだろう。こうして、一度の収穫から測り知れない収穫をたぐりよせることは、決して不可能なことではないだろう。

〔民国〕二十五年九月四日　蔡元培

＊本文中の（　）内は原注、〔　〕内は訳注を示す。

編集の経過について

茅盾

この本が読者にまみえることができたのは、ひとえに全国及び海外数千の友人たちの、識ると識らぬにかかわらぬ熱心な指教と援助の賜物である。

もともとこの計画は、偉大なかのゴリキーが発議して進められていた「世界の一日」を知って非常に新鮮にして有意義に感じられたので、大胆にも「まね」ようとしたものである。だが空前の「世界の一日」はまだ本にならず、「まねる者」であるわれわれは具体的な編集構成の面で立派な模範がえられず、その結果われわれの貧しい知力にたよって身のほども知らずに「創造」せざるをえなかった。くわえてこの仕事を担当したわれわれは、能力の点でも金力の点でも、国内と限ってみてもまったく渺たるものであること、これがまた困難を大にした。実を言うと、この本の原稿募集広告が出て以来、われわれは気持が落着く時とてなく、まったく自信がなかった。

いまこの書が案に相違して読者にまみえることができ、なおかつ読者に大いなる失望を味わわせるまでに至らなかったことは、もう一度謹しんでおことわりしておくが、ひとえにこの計画に熱心な援助を吝まれなかった数千の友人たちの助力と指教によるものである。

原稿募集広告を載せてから編集を完了して本にするまで合せて三ヵ月半にすぎない。編集委員会がまずつくられ、その主要な任務は構成を検討決定し、各方面の投稿を動員することであった。しかしながら編集委員会の同人は、ずっと文章を書いて来た文化工作者にすぎず、全国を網羅している、「投稿を動員」

してくれそうな文化的な組織に手づるをもたなかった。編集委員会は全力をあげて個人的な関係や団体の関係をたどって、計画が必要とする投稿を「動員」したが、成果は極めて小さかった。これは編集委員会がこの計画に対して、また読者に対して顔の立たない点である。すでに八方手はつくしたのだが。

しかしながら六月十日ごろになって、全国各地から湧き起るように送られて来た投稿の多さ、そしてその範囲の広さは、われわれを興奮させ、窮郷僻壌にもわれわれの微かな呼び声に対して熱意のこもる援助の手をさしのべてくれる、無数の文化工作の「無名の英雄」たちがいることを知らせてくれるとともに、わが民族の潜在的な文化的創造力の偉大さを深く認識させてくれたのであった。

われわれが受取った来稿は字数にして六百万字を下らず、篇数にして三千篇以上、新疆、青海、西康、チベット、蒙古を除く全国各省市からすべて原稿が送られてきた。僧侶、道士、娼婦それに「渡り者」など特別な「人生」を除けば、どんな社会階層や職業、「人生」も厖大な来稿の山のなかにその位置を占めぬものはない。そしてわれわれはなお南洋、ビルマ、日本に居住する援助者の原稿をも受取った。「五月二十一日」は文字が読めて祖国の運命に関心を抱き、かつこの危難の関頭にある祖国の全般的な真実の姿を知ろうと渇望する国内外のすべての中国人の魂をほとんど揺るがし、かれらはその頭脳をふりしぼった。

こうした偉大な「頭脳総動員」に対する整理、編集と採録を、われわれはどうして慎重かつ周到にやらずにおれようか。「投稿に動員をかけた」とき犯した失態をあるいは来稿の編集でとりかえすことができるのではなかろうか。編集に際しては普通の刊行物とはちがう方針をとらざるをえないのではないだろうか——これが当時のわれわれの願いであり、われわれはない知恵を絞って完全な方法をさがしもとめた。

ちょうど「投稿に動員をかけた」時、実際の困難がわれわれのさまざまな理想の画策を打破したように、われわれが編集方針を定めようとしたとき、事実上の困難がまたもやわれわれの「理想」を束縛した。本書の編集発行を担当する出版社の財力には限度がある。これはわれわれが顧慮せざるをえぬことであった。

そして一般読者の購買力の弱さはとりわけ顧慮せざるをえない。両者の兼ねあいのもとにわれわれが最初に決めた原則は、書物全体の字数は五十万から七十万まで、定価は一円六十銭を超えてはならない、ということであった。

この制約——定価の制約から生まれた字数の制約は、およそ社会的意義があるか、あるいは中国の一日の人生の一端をよく表現しているあらゆる原稿を「理想」的に存分に採録することを不可能にした。われわれは最初、使える原稿を全部で八百六十余篇、字数にして約百三十万字選んだ。予定の字数の最高限度（すなわち七十万字）を超えることほとんど二倍に近かった。いったいどうしたものか。ほとんど手のつけようがなかった。うつ手がないのに無理矢理うつ手を考えて、二次選考の基準を次のように決めた。

一、投稿者のいる地域によって分類する。同じ地域で投稿者の多い場合、たとえば上海市だけで六百篇あまりの投稿があり、総数の二十パーセントを占め、最初選んだ使えるものでも全部で百三十篇ほど、字数にして二十五万字——これでは厳選するしかない。

二、同一地域の投稿はまたその内容、性質によって分類する。同じ性質かまたは同じ生活面の原稿もやはり厳選せざるをえない。

三、いわゆる「厳選」の基準も、もともとたいそう決めにくい。普通は文章技術の巧拙によるのであるが、そうはできない。もしそうすると、この本は非常に単調になってしまうだろう——文章はそれほどでもないか、または通じないけれども内容が極めて意義のあるような多くの原稿をみな捨ててしまうのは、きわめて大きな損失ではないか。したがってわれわれの「厳選」の基準は、第一に内容、第二に文章の巧拙である。二篇または二篇以上の文章の内容が同じ方面のものならば、われわれは文章の最もすぐれたのを選ぶ。その次に内容がたとい同方面のものであっても、地位の違う人の書いたものであれば、一方がうまく一方が拙くても両方とも残す。たとえば上海の部でわれわれは紡績工場の

生活を書いた原稿を二篇採ったが、一つは職員が書き、一つは労働者が書いたものである（もし紡績工場の経営者も一篇寄越したらもっとよかったと思う。われわれが最初に「投稿に動員をかけた」とき、もともとそのように計画していたのだが、不幸にして効果は零に等しかった）。最後に、もしある方面の生活を書いた来稿が一篇しかなかったら、その文章がいかに通じまいが、われわれはやはり是非それを使わないわけにはいかない――われわれは、絶対に原意を失わない範囲でその文章を通じるようにした。

四、いわゆる「内容」についても基準を設けないわけにはいかない。まずわれわれはそれが五月二十一日に起った事でなければならぬことを求めた。そのつぎには「この事」が社会的意義を持たねばならぬ、あるいは少なくとも社会のある部分の人間の生活状況であること、最小限でもそれが別の重大な社会現象とつりあいがとれなければならぬことを要求した。

五、以上の諸点の他にもう一つ特別基準を加えた（実際は基準とはいえず例外なのだが）。すなわち遠辺各省の分で投稿が比較的少ないか極めて少ない場合は、ほとんど無条件に採用するということである。たとえば雲南の来稿のなかから、ある中学生の一篇を採った。この篇は内容からも文章からも上海、江蘇、浙江の同じ性質の落選者に比べてもずっと落ちる。しかしわれわれは「中国の一日」は文化程度の比較的高い少数の省や地区の「中国の一日」であってはならないと考えたために、遠辺の省の分に対して同一の尺度を適用できなかった。

六、でたらめも甚だしい迷信の文章はまた無条件に採用する。でたらめはやはり中国の人生の一面ではないか。

これがわれわれがうつ手がないなかで考えた手である。しかしながら、たといこのようにさまざまな制約を加えても、また好ましい原稿を少なからず捨てても、総括してみるとなお四百九十篇ほど、総字数八十万にもなり、予定の字数の最高限度を十万字も超過した。これは最初に選んだ使える篇数と字数に比べ

てすでに半分ばかりに減っている。このことはまったく残念なことであるが、読者に対してはなんとか申し開きがたつだろう。というのは、われわれはもう最大の努力をしたし、いま印刷する八十万字が包括する生活面も広く複雑であって、かりにそれが全中国の横断面を表現しうると言っても、おそらくそれほど誇大にはならぬのではないか。しかも実際に「窮屈な靴」をはかざるをえなかったがためだろうが、この五百篇ちかい短文集で、材料の重複やその場しのぎの寄せ集めといった欠陥は、ほとんどない。この点もわれわれはまずなんとか読者に対して顔がたつと思っている。

材料が決まると、ひきつづいての問題はどのように編集するかということである。文章の内容によって分類するか、それとも地域によってか。われわれは後者に決めた。理由は、文章の内容で分類すれば、きっと分類できないのがたくさんでるだろうし、分類できるものでも一、二類にとどまらない（もっと多くの類にまたがる）だろうということだけではなく、地区によって分類すれば、不均衡な発展という中国社会の特性がかなりの程度表現できるからである。たとえば、上海の部で小学教師の生活の清貧を描いた文を収め、山東、河北およびその他の省でも同じような性質の文を収めた。しかしながら「清貧」ということでは同じでも、その社会的な原因にはすこぶる違いがある。上海のこの一篇と上海の生活を描いたその他の文とをひとまとめに置くことは、「小学教師の生活」とかいうふうな分類をして出すよりも、ずっと意義があるし、特定の区域内の社会生活の錯綜した関係をずっとよく表わせると思う。山東、河北およびその他の省の同じ性質の材料についてもまた同様である。

しかしながら、たとい地域によって分類するとしても、ぴったりしない文がのこる。それは汽車や船での見聞の文である。そうしたものをわれわれは特にひとまとめにして出し、はなはだおもしろい名を借りて「陸・海・空」とした。「空」に関しては一篇しか受けとらず、本来なら「浙江」の部に入れてもよいのだが、いまは「空」の場面を受持ってもらうためにお出ましねがった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com